



| | |
|--------------|---|
| Title | 懷徳堂講座講演要旨 |
| Author(s) | 片桐, 洋一; 伊井, 春樹; 伊藤, 敏子 他 |
| Citation | 懷徳. 1984, 53, p. 69-75 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/90630 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本文化における古典——伊勢物語の場合——

昭和五十九年春季

伊勢物語の本質とその背景

片桐洋一

『伊勢物語』を一読すると、誰しも、その簡素な文体と横溢する抒情性の奇妙なバランスに驚く。たとえば、主人公の衣食住についての記述はなく、どんな家に住み、どんな衣裳をまとい、どんな食事をしていたのか、まったくわからないのに、人々は疑問を抱かずに読んでいたのである。要するに、形や物よりも、情(こころ)に焦点をあてて書かれているのであり、各時代の享受者は、それぞれの生活、それぞれの知識教養に応じて、それに形や物をあてはめて、その情(こころ)を読んでいるのであるが、このような作品のあり方は日本の文学や芸能に共通する特質だとは言えないだろうか。ところで、このように『伊勢物語』の根本をなしている情(こころ)として、まず第一にあげられるのは、過ぎ去りゆくものを惜しむ情(こころ)である。ある時は過ぎ去りゆく人を惜しむ情となり、ある時は過ぎ去りゆく季節を惜しむ情となり、またある時は過ぎ去ってしまった栄華や青春を惜しむ情となつて語られているが、これこそが、まさしく『伊勢物語』

の本質であると言つてよいと思う。そして、この点も夢幻能をはじめとする我が国の文学や芸能の多くと共通するところの多い特色であると私には思われる。

以上、『伊勢物語』の特質を二点あげ、それが『伊勢物語』だけでなく日本の文芸の特色にもかかわると言つて来たのであるが、この特色、実は中国文学の影響もあつて生まれたのではないかと最近思うようになった。今回の講演はこの点を中心に話してみたい。

伊勢物語と源氏物語

伊井春樹

伊勢物語と源氏物語の關係は、早くから影響とか受容の問題として言及されてきた。源氏物語の長い注釈史の中で、すでに鎌倉時代成立の『紫明抄』において、源氏物語における伊勢物語の類似表題や引歌の指摘が見られる。以後表現から構想にいたるまでの詳細な探索が続けられ、源氏物語の世界に伊勢物語がいかに反映しているか、両者の緊密な關係が次々と明らかにされるにいたつた。今後ともこの方向はさらに多面的に追究され、源氏物語の発想基盤にまで分析の斧は加えられるとともに、その質的な相違も明らかにされていくであらう。

古来、人々は二つの物語を、きわめて類似した作品として読んできた。両者に描かれた世界を重ね、そこに登場する人物を同一のレベルで対比させて味わつてもきたのである。その具体

的なあらわれが、鎌倉時代にまとめられた『伊勢源氏女十二番合』で、ここでは業平と光源氏をめぐるそれぞれ十二人の女性を取り出し、その優劣を競わせているのだ。『伊勢物語』も『源氏物語』も、所詮はさまざまなタイプの女性のありようを描いていった物語とする考え方であろう。これは中世の読者たちの両作品への解釈であり、受容の実態でもあった。ここではまずその内容をたどることによって、伊勢物語と源氏物語の二つの世界を明らかにしていきたいと思う。

伊勢物語と絵画

伊藤 敏子

『伊勢物語』は『源氏物語』に初めてその名がみえ、当時既に物語絵巻として後宮の女性たちに愛好されていたことが知られるが、平安時代の絵巻の遺品は残念ながら全く伝わっていない。鎌倉時代の遺品も完本はないが作絵絵巻の残欠一巻と白描絵巻の残欠があり、両本の画面には明らかに祖本の投影が認められるので、王朝の絵巻を考察する重要な手がかりとなる。なお模本ではあるが異本伊勢物語絵巻の完本があり、十四世紀初頃に古絵巻に基づきながら改変や創作を加えた新しい絵巻が成立したことが解る。室町後期以降は絵巻や絵入冊子がかなり伝存している。それらの諸本は、本文は定家本に固定しているが、画面は大別して二群に分れる。その一群はやまと絵の伝統画風を継承する^{じょうそく}上手の作品で、先行絵巻を写し、図様が一定し

ている。他の一群は俗に奈良絵本と呼ぶ^{びて}下手な画風の作品で、先行絵巻の図様を下敷にしているが、自由に改変あるいは独創的な画面を増補しているので多種に分れる。これらの伝本の画面は一方で扇面や色紙、屏風などの画題に転用され、さらにまた工芸意匠にも応用されるなど、源氏物語絵と共に古典の代表として人々に親しまれ、綿々と伝承されてきた。

今回はスライドを使用し、主な遺品の本文と絵の関わりや伝承と享受の過程について述べたいと思う。

鈴木春信の見立絵―伊勢物語の場合

小林 忠

鈴木春信(一七二五―一七七〇)は、多色摺木版画の錦絵の創始に多大の貢献をした江戸時代中期の浮世絵師である。彼は、とかく遊里や芝居町といった悪所の風俗に主題を限定しがちな浮世絵師の中にあつて、王朝古典の文学作品に作画の契機を得ようとする特殊な取材傾向をもっていた。それも原典として選んだ物語や和歌の情調を、かつての宮廷風俗に忠実に描くのではなく、当時の江戸の庶民日常の生活風俗のうち、やつし、見立て、変奏するという、いかにも江戸っ子の好みに合った手の込んだ手法をとったものである。

こうした見立絵と呼ばれる機知的な絵画手法の諸相を、とくに伊勢物語に由来する春信画を中心に点検し、考察してみた

伊勢物語と謡曲

伊藤 正義

『伊勢物語』はわが国の代表的古典だから、中世において謡曲というジャンルが生れると、それに題材を求めた曲が作られた。その場合、たとえば「井筒」という曲は、『伊勢物語』二十三段の筒井筒の話に基づいて作られた曲である、などと説明されて来た。それが間違いというわけではないが、近年ではもうそんな大雑把なことではなく、当時『伊勢物語』がどのように読まれ、理解されていたかという享受史をふまえて、謡曲の構想や表現を考えるようになって来ている。しかもまた謡曲は、その時代の文学事情を背負いつつも、作者の個性を反映した結晶であり、謡曲自体の展開史の中で成長してゆく。このような観点から、世阿弥以前の古作「雲林院」、世阿弥の「井筒」と「右近」、世阿弥の子の元雅の「隅田川」、世阿弥の女婿の金春禅竹の「小塩」と「杜若」などに触れつつ、『伊勢物語』に関連した謡曲作品の特徴と展開、また素材処置の作者の個性などを考えてみたい。

また、謡曲は人々の間に広く流行して、室町末期には教養人の必須課目となり、古典としての位置を獲得するに到る。それ故に、謡曲にとり入れられた題材に逆に影響を与えている場合も少なくない。『伊勢物語』についても、後代の享受に謡曲からの影響が認められる場合のあることなどにも言及したいと考

えている。

伊勢物語と和歌・連歌

島津 忠夫

伊勢物語は、古今集・源氏物語とともに中世においてももともとよく読まれた古典であったので、中世の和歌や連歌におよぼした影響はきわめて大きい。

藤原定家は何度も伊勢物語を書写し、その系統の諸本が広く流布し、また注釈書がいくつも作られて、それが秘伝をもとになって享受されてゆく。その注釈は和歌知頭集・冷泉家流伊勢物語抄などの古注から、一条兼良の愚見抄や宗祇の講義を肖柏が聞書した肖聞抄以下の旧注へと大きな変貌を遂げる。従って伊勢物語を本歌・本説としてよまれた和歌や連歌も、それぞれに当然その時代時代の特色を持っているわけである。

歌人でもあり連歌師でもあった心敬は、なお解釈は古注に拠りつつ、古注の高踏無稽な説にあまり抛りかかることなく、伊勢物語を和歌・連歌の作品に生かしていることを、心敬の自注を通して、具体的に見てゆくこととする。

さらに、心敬ら七人の連歌師の句を集めた宗祇による『竹林抄』や、宗祇・兼載撰の『新撰菟玖波集』から、伊勢物語とかわりのある句をいくつかととりあげ、伊勢物語の世界が、どのように連歌によみこまれていくかについて考えたい。

中国の人物像——昭和五十九年秋季

諸葛孔明——政治家として

狩野直禎

諸葛孔明は『三国志演義』の世界では、軍師として描かれている点が多いのであるが、陳寿の『三国志』では、劉備の謀臣として、蜀漢の丞相として叙述されているのである。魏・呉・蜀三国鼎立の時期にあって、戦闘は避けられるものではなく、特に魏・呉の二国に較べると、必ずしも人材が豊かでなく、孔明も数次にわたり北征を敢行し、先登に立って戦うのであるが、彼の本領はやはり政治家としての活躍にあったであろう。陳寿が

「蓋応変將略。非其所長歟」

と言っている通りである。さらに陳寿は「諸葛亮伝」の評及び「上諸葛氏集表」の中で、孔明を古えの斉の桓公の相管仲及び漢の高祖の功臣で、三傑の一人蕭何の亜匹というように記しているが、これが彼れの実像に近いものではないだろうか。

私は政治家としての孔明を取あげて考えていきたい。先ず第一には、彼れが後漢末の混乱期にあった中国世界を、どのような方向に導いていこうとしていたかを、孔明よりやや先んずる袁紹、荀彧、沮授らの意見、及び同時代人の魯肅の説などと比較しながら検討していきたい。

第二には孔明の政治信条というか、政治家としての基本的な身の処し方について述べたい。そして第三には彼れが實際蜀漢において施行した内政・外交について触れておきたい。これらの点について述べるに当たっても、同時代人との比較を行うつもりである。

李白と杜甫——巨星の出会い、

黒川洋一

われわれはしばしば芸術の歴史の上において、性格を異にするふたりの巨人が同時代に出現し、あるいは反発し、あるいは尊敬しながら、個性の異なる作品を創り出した例に遭遇する。

モーツァルトとベートーベン、ゲーテとシラー、清少納言と紫式部等々がそれであるが、中国、八世紀の詩人、李白と杜甫の出会いもまた、そうした例のなかのもっとも輝かしいもののひとつに数えることができる。それは正しく巨星の出会いといふにふさわしい偉観であり、壯観であった。韓愈のことを借りれば「李杜文章在り、光綫万丈長し」である。ふたりの詩人が河南の洛陽で出会ったのは、今を去る一千二百数十年前、李白四十四歳、杜甫三十三歳のときであった。ふたりの交遊はわずかに二年ばかりにすぎなかったが、その二年間こそは世界の文学の歴史の上に記念されるべき重大な時間であったといつてよい。後年、杜甫はその目に映じた李白を想起して、「李白一斗詩百篇」と詠じている。飲めば飲むほどに、美しい詩がその口

をついて滝のごとく奔騰する天才を前にして、若き杜甫はいかに苦しみ、いかに悩んだか。そしてその苦しみと悩みのなかから、いかにしておのれの文学を生み出していったか。ふたりの摩擦と友情を芸術一般の問題に還元して述べてみたいと思う。

蘇 東 坡—政治と文学

竺 沙 雅 章

蘇東坡の画像は多いが、それには二つの型がある。一つは「笠履図」とよばれる、すげ笠をかぶり木屐をはいたもの、いま一つは頭に「東坡巾」をつけたもので、いずれも野人の姿である。東坡には、冠服に威儀を正した大臣の姿などはおよそ似つかわしくなかったようである。

しかし彼らは、何よりも先ず官僚であった。四川の眉山という町の新興階級の家生まれた彼は、小さい時から范仲淹のような政治家になることを志し、父蘇洵の熱心な教育をうけて成長した。果たして難関の科挙に及第して官吏となり、ついには礼部尚書にまでのぼった。ただ朝廷では、政策遂行上の重要なポストには一度もついたことはなかった。彼の行政手腕は、その文名ほどには認められていなかったことを示している。彼自身、都での生活は楽しいものではなかったようで、都でつくった詩は生氣にとぼしい。もともと都に生んだ期間は短く、官歴四十年中、あわせて八年にすぎない。

東坡の政治家、文学者としての本領は、都を離れて地方にい

る時にこそ発揮された。各地の知事をつとめて善政を行い、詩文の創作も旺盛であった。それでもつねに、一日も早く宮仕への束縛から逃がれ、自由な境遇になりたいと願っていた。その意味で、黄州や海南島に流された謫居の期間は、公務のわずらわしさから解放され、大自然に身を委ねて、思索と創作に打ち込めた時期であった。後世の東坡愛好者が抱く蘇東坡のイメージも、これらの時期のものである。

孫 文—人と思想

堀 川 哲 男

孫文は一八六六年、広東省香山(中山)県翠亨村の貧しい農家に生まれた。その号によって中国では孫中山と呼ばれ、欧米諸国では孫逸仙(Sun Yat-sen)の名で知られている。

彼は死の前年、広東において行った「三民主義講演」の冒頭において、「三民主義とは何か。もともと簡単な定義をもっていえば、三民主義とは救国主義にはかならない」と述べている。救国主義——この言葉は、三民主義の精神を説明するのと同時に、孫文の五十九年の生涯をもっとも的確に表現しているといえるであろう。清末、列強の侵略が激化するなかで中国の政治

変革を志した彼は、日清戦争の敗北を機に興中会を率いて広州起義を発動し、革命運動への決定的な第一歩を踏み出した。以後、一九〇五年の中国同盟会の結成と一連の武装蜂起、一九一一年の辛亥革命とその後の反軍閥闘争、一九二四年の中国国民

党改組と連ソ・連共・扶助農工路線の選択、こうしたなかで、彼はつねにもっとも重要な指導者であり続けた。そして彼の行動を支える思想的基盤が三民主義であった。

三民主義はすぐれて実践的な政治理論であり、彼の革命実践を離れて思想として抽出して語ることは、単に困難であるばかりでなく、ほとんど意味をもたないであろう。それは、その時の政治課題との関連において、たえまなく内容を発展させたからである。その意味では最後まで未完の理論、発展途上の思想であったといえるであろう。ここでは三民主義の発展とその特徴を孫文の生涯と重ねる形で概観してみたい。

海 瑞—ある清官の生涯

岩 見 宏

海瑞という名は、文化大革命の発端となった呉晗批判事件に関連して広く知られるようになった。この事件がなかったなら、恐らく専門家以外には、あまり知らないままに過ぎた人物であろう。官僚ではあるが、権力の中核に立ったこともなければ、大きな事件に関与したわけでもない。しかし剛直な人物として当時有名であったし、また地方官として行政の実状に関する詳しい記録を残している点では、以前から研究者の注意をひいていた。

かれは科擧の最終段階で二回失敗し、進士になることを断念して、挙人という資格で官界にはいった。このことは、出発点

においてエリートコースに乗りこねたことを意味する。そのわりには、最後にかなり高い官位にまで到達した。その間、抜擢もされたが、投獄されて死刑になりかけながら、また復官するというように、波瀾に富んだ経歴を残している。このような経歴は、かれの独特な性格に由来する点も多いように思われる。かれの行動は、当時の官僚の中では、全く型破りのものであった。どのくらい変わった人物であったのか、その生涯をたどりながら、当時の社会におけるかれの存在について考えてみたい。

王 安 石—財政改革の旗手

斯 波 義 信

歴史事件は一度しか起らない。まさに「千載一遇」の運命に向って、その時代人がなにを課題に選び、どのような足跡を歴史にのせることになるのか。ことに変貌する世相のなかで、それらを知ることが、現代の我々の生き方にも訴えるものがあるにちがいない。中国史上の文化黄金期とされる宋代（十〜十三世紀）は、同時にまた「宋型」の中国社会が生まれ出て、元・明・清へと平衡に達してゆく起点でもあった。王安石（一〇二一〜一〇八六）は、こうした新しい時代の型が打ち出される一〇三〇年代前後に登場した。時の大きな流れの一つは文化と政治との未曾有の深い交渉であり、もう一つは国の永続を見込んでいる社会と財政の基盤整備であった。唐宋八大家に加わる文章家と

して、さらに能書家、詩人、思想家として、王安石は文化の昂揚期を代表する一流の教養人であったのだが、彼の全生涯を賭けた事業は、結局、いかにして国の存立を救い保証するかであった。彼が立ち向った財政の改革とは、長期・短期の目でみて

どのような性質のものであり、なにをどこまで改革し、また一体、なにが彼をそうさせたのだろうか。人物評というよりは、時代の潮流のなかで、一定の先見性をもった個人の行動軌跡を追って、歴史の運命を考えてみたい。



中井碩果文編
(大阪大学蔵)



並河寒泉画像
(早川自省画, 羽倉敬尚賛)
(大阪大学蔵)

「懷徳堂物語(三)」(五頁) 参照。